

[成果情報名] メロンの隔離床栽培における適正施肥量

[要約] 長崎型イチゴ高設栽培システムを用いたメロン栽培における基肥施肥量は株当たりN成分9 gで体内窒素濃度が生育後期まで安定し、ネットの美しい、高糖度の果実が得られる。また、環境保全の観点からは基肥施肥量は株当たりN成分9 gが適する。

[キーワード] 隔離床、メロン、施肥量

[担当] 総合農林試験場・野菜花き部・野菜科

[連絡先] 電話 0957-26-3330

[区分] 野菜

[分類] 指導

〔 背景・ねらい 〕

長崎県における既存のイチゴ高設システムの栽培槽を用いたメロン栽培は、土づくりが不要で、肥培管理、水分コントロールなどの栽培管理等を適切に行うことにより、高品質・安定生産が可能である。

これまで水分コントロールについて明らかにしてきたが、ここでは、適正施肥量について明らかにする。

〔 成果の内容・特徴 〕

- 1．葉柄中の硝酸濃度は、基肥を株当たりN成分9 g以上にすることによって、メロンの養分吸収が最も盛んになる果実肥大期（開花～開花後30日）に最も高く推移し、樹勢、葉色とも健全に推移する。（図1、図2）。
- 2．ネットの発現は基肥を株当たりN成分7～9 gが最も良く、N成分12 gでは若干縦ネットが強く、果形が乱れる傾向にある（図3）。
- 3．糖度は株当たりN成分9 g以上で安定し、これより少ないと低下する（表1）。
- 4．生育後期における廃液濃度とその量は、株当たりN成分12 gではその濃度が他の区と比較して高めに推移する。

〔 成果の活用面・留意点 〕

- 1．かん水はドリップ式のチューブなどで均一に行う。
- 2．隔離床では施設内が乾燥しやすいため、果実肥大期（開花後約30日間）には通路への散水等を行い夜間～午前中の空中湿度を高める必要がある。
- 3．培土はイチゴ専用培土（薩摩土65%、やしピート25%、バーク堆肥10%）を利用する。

〔 具体的データ 〕

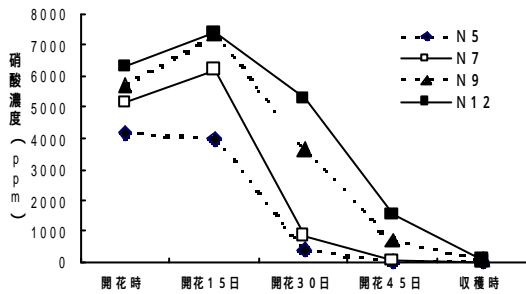


図 1 葉柄中の硝酸濃度の推移

注) 調査は着果節直下の摘果枝を残し、適時測定を行った。試験区は一區 10株反復無。ただし、収穫時は結果枝を測定。

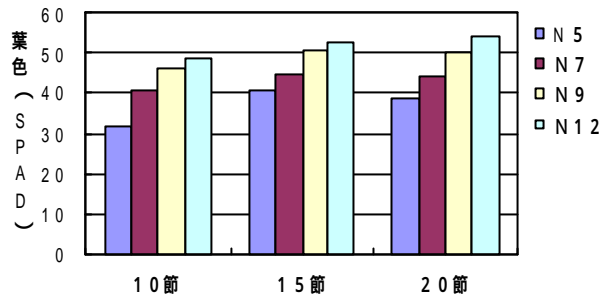


図 2 開花 30 日後の葉色の比較

ネット発現
高さ：低 1 ~ 5 高
太さ：細 1 ~ 5 太
揃い：悪 1 ~ 5 良
密度：粗 1 ~ 5 密

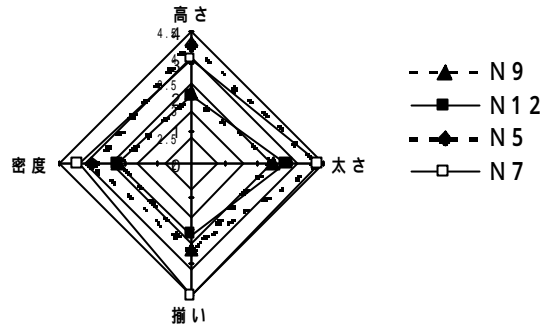


図 3 処理区におけるネット発現

表 1 収穫時における果実の品質

処理区	開花日	収穫日	着果節位	果重	果高	果径	花座径	果梗長	肉厚	糖度	糖度
			節	g	cm	cm	cm	cm	cm	内壁部	中央部
N 5	5/8	7/8	10.1	1833	15.7	14.7	1.9	1.0	3.8	13.4	11.2
N 7	5/7	7/8	10.4	1780	15.4	14.5	2.0	1.1	3.9	14.8	12.1
N 9	5/7	7/8	10.1	1699	15.5	14.1	1.9	1.0	4.0	15.8	13.0
N12	5/7	7/8	9.8	1846	16.1	14.5	1.8	1.0	3.9	15.7	12.8
有意差	N.S	N.S	N.S	N.S	N.S	N.S	N.S	N.S	N.S	**	**
l.s.d 1%										0.73	0.66

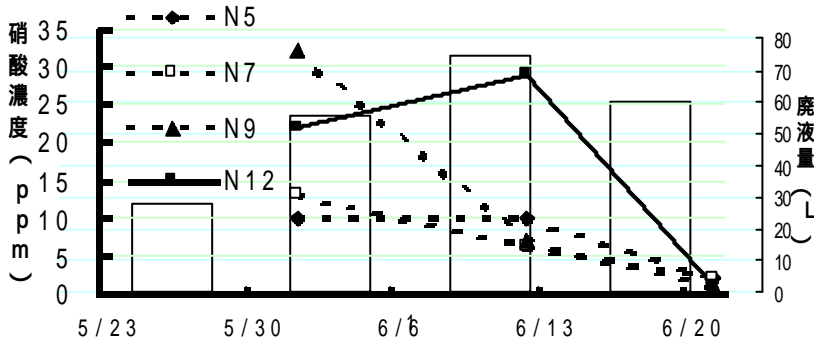


図 4 生育後期における廃液濃度とその量

耕種概要

(1) 試験区の構成

区名	基肥施肥量
N 5	株当たりN成分 5 g
N 7	株当たりN成分 7 g
N 9	株当たりN成分 9 g
N12	株当たりN成分 12 g

- (2) 供試品種：ベネチア夏
- (3) 定植平成14年4月15日
- (4) 栽植密度 180株/a
- (5) 肥料名：スーパーメロン配合

〔 その他 〕

研究課題名 : 施設野菜の次世代型栽培技術の開発
 予算区分 : 単
 研究期間 : 2001 ~ 2005年
 研究担当者 : 下位 祐子